

神奈川大学のさらなる発展を願って —— 新しい皮袋に新しい酒を ——

松 山 正 男

イギリス首相サッチャーは、就任演説で、自分が退任するときはイギリスをより良くしてみせると宣言した。思えば16年前、ほくが就任し、今退官するにあたり、校舎は素晴らしくなったが、外国語教育はどの程度改善されただろうか。

1960年代から斜陽化したイギリスは、1987年にはGNPがドイツやフランスはもちろんイタリアにさえ下回ってしまった。世界最強を誇ったアメリカも1970年代の石油危機以後ドルが暴落し、企業のみか、大学も多くが倒産や改組にあけくれた。

他方、我が国は1970年代後半から好景気で、右上がりの発展をみせ、ハーヴァード大学のエズラ・ヴォーゲルが Japan as Number One (1979) を書き、その副題を Lessons for America 「アメリカにとっての教訓」とつけて、英米とも日本を模範みにすべきだと力説し、大いに日本人を得意がらせた。

その当時、経済学者の矢島欣次東工大教授が予言した言葉を思い出す。「GNPとはぐんと伸びればパッとなくなる」。そして今や銀行で昔の名前のおりの所は皆無だし、企業の倒産が相次ぎ、リストラによる失業者や、ホームレスが激増している。教育界の危機も徐々に進行している。2・3年以内に短期大学の5割が、3・4年以内に私立大学の4割と、国立大学の3割が経営危機や倒産に追い込まれようとしている現実を大学関係者はどこまで予見しているのだろうか。

サッチャー政権以来 [英国病] の根本原因が政

治や経済よりももっと根深い国民の心的問題にあることに気付いた歴代首相は、教育の大改革を断行した。1988年にカリキュラムを統一し、さらに学習成果の全国的査定を実施した。特に注目すべきは1960年代では11歳で外国語を学んでいたのは僅か25%であったのが、国際化に最も必要なのが外国語であると気が付くや、1980年代には90%を越えた。大英帝国時代は英語万能だと思いがり、ついに文化的活力を失ってしまったことを自覚したのである。そして今やEU加盟国は母国語の外に2ヶ国語が必修科目となっている。

英語にあぐらをかいていたアメリカもまた1970年代当時外国語能力が過去200年間で最低水準に落ちていたことを知るや、カーター大統領が1979年に危機を訴える教書を発表、その表題に The United States: the Deaf, Dumb and Blind Giant とつけ本格的に改革に乗り出し、次々と改革案(1983、1986)を発表し、50州中40州の公立中学で必修科目となり、大学入学要件とするところが25%も増え、例えばハワイ大学では外国語は2年間必修、しかも30ヶ国語が開講されている。

アジア諸国のなかでも小学校から外国語を本格的に導入していないのは日本だけなのだ。例えば隣の韓国は1997年から小学校3年生から4年間、英語は必修科目とし、2001年から中学校では第2外国語として、独・仏・露・西・中・アラビア語の7言語が開講され、さらに高校で続けるため、高校卒業までに英語を10年間、第2外国語を6年

間学んでから大学に進学するようになっている。

神奈川大学での勤務の16年間は一般教養として英語の改善を目指して来た。矢折れ刀尽きた感があるが、幸い鳥越教授が外国語教育改善協議会長になってから、語学教育では常識である (1)習熟度別クラス編成 (2)小人数制が実現でき、大変喜ばしい。しかし、時代に逆行した、必修単位数の激減、第2外国語の軽視、学部自治の壁に遮られたカリキュラムの抜本的改善の困難、教員自身による授業研究など、たくさんの課題が未解決のま

ま去らねばならないのは断腸の思いである。

神奈川大学は強い決断と実行が伴えば輝かしい未来が開かれる可能性が大いにある。そしてその大きな柱が外国語教育の充実であることを改めて強調し、同時に定年の今日まで支えてくださった先輩、同僚、事務局、学生諸氏に心から感謝する。また154名のゼミの学生との交流を生涯の宝として大切にしていきたい。

(2002年1月14日 70歳の誕生日に記す)

留学生の問題

浅山佳郎

日本への留学生数は、93年度に5万人をこえてから5年ほどは5.1万人から5.3万人前後であったが、ここ3年ほどは、99年度が約5.6万人、00年度が約6.4万人、01年度が約7.9万人と、かなり増えている。

神奈川大学も同様で、横浜キャンパスだけを見ても、98年入学の4年生の留学生が4人であるのにたいして、99年入学の3年生は24人、00年入学の2年生は48人、01年入学の1年生は65人である。来年度はさらにこれよりも多い100名前後の留学生が予想されている。

問題は、増える留学生にどう対応するのかということである。

はっきりとは明言されないが、我々の社会がおそらく漠然と持っている印象に、日本が経済大国であるから留学生がやってくるのだ、というものがあると思う。露骨な言いかたをすると、「金になりそうだから日本に留学したいんじゃないのか」という印象である。

留学と経済大国であることとの間に関係があることを否定するわけではない。留学生の多くが日本を留学先と決めるのに、日本の経済という要素が強くかかわっていることは確かである。しかし、経済という要素を「お金」にだけねじまげて強調

することは、最近の日本経済の失速と留学生数の増加を説明できない。だから、もし「お金」になりそうな経済力が留学の理由だという印象を持ちつづけようとするなら、この3年ほどの留学生の増加を一時的なもののみなさざるをえなくなる。

この3年間の留学生数の増加が一時的なものにおわる可能性もある。だがその理由は日本経済が失速したからではなく、日本社会があいかわらず閉鎖的であるからだ。そして、留学の理由を「お金」にだけむすびつけようとするような態度は、もっとも閉鎖的な姿勢のひとつだ。

我々はもう少し公平に見るべきだと思う。つまり、日本社会の魅力は経済力だけではないし、留学生の目的もそれだけではない。とくに留学生の大半を占めるアジアからの学生が日本の大学を留学先として選ぶのは、日本人学生が大学に進学するのと同じ理由だと考えるほうが、より安定した見方だろうと思う。学生たちは、高等教育を受けるために進学する。高等教育機関で何らかの教育や技術を身につけ社会に参加すること、そしてそれによってより良い暮らしをすること、これが大学へ進む目的である。そしてこのことは留学生も変わらない。

どこの国や地域でも高等教育機関はある。しか

しそれがいわゆる「大衆化」されているかどうかには開きがある。いくつかの国や地域では、少数のエリート以外の人々のための高等教育機関をまだ数量的に十分に確保していない。しかしそうしたところでも、高等教育を受けたいと考える「大衆」が増えている。そして、経済的に豊かになりはじめているアジアに住む人々で、エリート教育としての高等教育を受けるところにまでは及ばないが、いわゆる社会の「中堅層」として「大衆化」された高等教育を受けたいと考える人にとっては、自分の国または地域にある大学のほかに、オーストラリアやアメリカとならんで選択肢のひとつとなっているのが、日本への留学だというわけである。

いっぽうで、日本の大学は、いわゆる大学の「大衆化」によって、この50年ほどかけて、高等教育をより多くの人々に供給するためのノウハウを積み重ねてきたとも言える。その意味で、神奈川大学のようないわゆる「中堅」の大学がストックしている高等教育機関としての「知」は、いまや日本社会だけのためのものではない。世界中でこうした高等教育を必要としている「中堅」の人々のためのものである。

日本の大学へやってくる留学生をそのように見ること、それから日本の大学をそのように見ること、こうした見方のほうがより等身大の把握であり、長続きする理解ではないだろうかと思う。

品茶に湖畔、秋ふけて

望月眞澄

2001年9月24日から28日まで、わたくしは招かれて中国国家教育部人文社会科学重点研究基地の主催する第2回中古漢語国際学術会議に出席することができた。昨今、中国では各学問分野における重点研究基地を決めることになった模様である。浙江大学では、漢語史研究センターが、全国的にみた漢語史研究の中心として指定されたのである。浙江大学は従来、敦煌学の伝統があり、その中心大学指定にあたっての申請には「敦煌学」を希望したとのことであるが、「敦煌学」は敦煌その地が相応しいだろう。敦煌には昨年行ったが、さすがに現地の圧倒するものは凄い。これは漢字本義の「凄い」である。この秋11月7日特別講演の我が大学の求めに応じて来てくれた張湧泉氏はその伝統の中にある最新鋭である。

さて、今回の学術会議は、この張湧泉氏・主任で六朝語法研究者の方一新氏らが主体となって万般のご苦勞を担ってくれたのである。総参加者83名、学術報告者27名、内日本人4名、欧米人1名。27名を2班に分けて発表と討論をした。これでは

時間が少ない。わたくしは、上述のようにこの敦煌に因縁深い大学であるからにはと考えて、敦煌に関係するテーマを持っていった。従来、敦煌資料に現れる俗字研究の材料としてばかり見てきた『龍龕手鏡』の研究方向にいささかの疑問を抱いていたので、該当資料研究の方向転換を促すつもりであった。総括では、小論も特に取り上げてもらったが、発表に対する評価をすることに疑問を感じる。ひどいのになると、けなされる者もあり気の毒であった。なにか古い官僚主義を嗅ぎ取ってしまった。これは国家がカネを出しているのであるから当然だとでもいうのだろうか。中古漢語もまたいろんな分野がある。音韻・語彙・語法・言語史分期など、会議が一段落したとき女性の院生が駆け寄ってきて「先生から学問へのアドヴァイスを一言」などいわれ、一分くらいで言えるものではない。「まずは資料をしっかりとってそれを解明して…」などと言っている内に車が晩餐会に出るぞなどと促される。ただし、西湖のほとりの品茶は夜の九時過ぎまで行われ、さすがにお茶

と談義の好きな民族のお国にきたものだと思いつつ、ペーパーだけでは分からない学者の素顔に接することができたのは大収穫であった。香港からの丁邦新教授は研究の高さには敬服していたが、人物もこれまたすてきな愛妻家で、好人物の模範のような方であった。

中国からもにわかには学会議へのお誘いが盛んになってきた。この学会議の前、8月には章太炎記念学会議からの誘いがあり、もう来年8月石家荘での音韻学会の誘いがある。我々の学生の時代には考えられない隔世の感を深めているこのごろである。

脳の機能と外国語習得

伊藤克敏

「ことばはどのように習得されますか」と質問すると、大抵の学生は「周囲のことばを真似て覚えて行きます」と言う答えが返って来ます。果たして、この答えは正しいのでしょうか。こどもは外国へ行ったら、すぐ、外国語を話すようになります、と言われていますが、事實は、そうではないようです。個人的な話で恐縮ですが、在外研究でポストンに連れて行った筆者の当時8歳の子ども(M子)は、最初の数ヶ月位は“Hi”, “Yes”, “Bye”と言った「決まり文句」以外は殆ど、英語を話そうとしませんでした。電話がかかってくると“Hello”, “Yes”, “OK”, “See you”, “Bye”といった決まり文句で、返事をするだけでした。第二言語習得の初期の段階で遊び等で使う決まり文句を習得することは多くの学者によって指摘されています。M子は第二言語習得論で言う「沈黙の期間」(silent period)にあったようです。脳の機能から言いますと、後頭葉でことばを理解し、側頭葉で、じっくり溜め込んでいたことになります。数ヶ月頃から急にきれいな発音で英語が少しずつ出て来ました。そして、1年後帰国する頃には、近所の子どもたちとかなり話せるようになっていました。しかし、12歳と13歳の姉は英語を話すのに相当苦労していたようです。末娘のM子は丁度言語習得の敏感期(sensitive period)にあったのがラッキーだったと言えます。

言語学者として知名の故服部四郎東大教授は海外に在住のお孫さんが来日した折、夏休み中、日

本語の集中訓練をされたのに、滞日中は殆ど日本語を話そうとしないのがっかりされたのですが、帰国後、日本語が次々に出てきた、というエピソードを日本言語学会の講演で紹介されたことがありました。側頭葉で溜め込まれた日本語が帰国後、前頭葉から出て来た訳です。側頭葉のウエルニッケ領域と前頭葉にあるブローカ領域との間に伝導線維が走っており、側頭葉から伝導線維を通過してことばの情報がことばの産出を司るブローカ領域にどんどん送りこまれて行くのです。目と耳から入ったことばは側頭葉でじっくり醸成され、それが徐々に前頭葉から産出される訳です。

こういった習得過程は大人の場合も同じで、耳と目から外国語をたっぷりと入力することが、豊かな外国語能力を養成するには不可欠な訳です。こういった「入力仮説」(Input Hypothesis)が1980年頃南カリフォルニア大学の Krashen 教授によって提唱されましたが、脳の機能から言っても妥当な説であると言えます。従って、ことばは単に模倣、反復と言った単純な方法だけで習得できるものではなく、膨大なインプット(クラッシュェンは massive amount of input とのことばを使っています)が必要となる訳です。つまり、多量の聴取(hearing)と読書(reading)が必要不可欠な条件となります。どのように美味しく、学習者に多量のインプットを与えることができるかが外国語教育の鍵と言えます。